

## 香港人は水煙草を抱いていた

五月二十五日（火）午後一一時過ぎ。昆湖飯店8Fドミトリーの二室（一泊一二元）にいる。同室は香港人と、もうひとり西洋人の三人。

すでに寝息をたてている西洋人のために部屋の明かりを落して、僕は今、暗がりの中、部屋の壁にもたれて五星啤酒を飲んでる。微かに湿り気を帯びた風が、開け放した窓から流れ込んでくる。

香港人の若者は椅子に腰を下ろして、竹製の太い水煙草を吸っている。彼が煙草を吸うたびに、こぼこぼと水煙草は低い音をたてる。

竹製の水煙草は初めて目にするもので、おそらくこの地方の独特のものなのだろう。直径は七、八センチ、長さは五〇センチほどのもので、暗がりの中で言葉もなく水煙草を吸っている香港人の姿を見ていると、まるでアヘンにまどろむ中国人のように僕には思える。（もちろん僕はアヘンを吸引する器具について知らないし、単なるイメージにしか過ぎないのだけれども。）

香港人の若者は、今朝僕がこの昆湖飯店にチェックインしたときも、夕刻一度戻ってきたときも、そして今現在も同じように水煙草を吸い続けている。おそらくごはんを食べるときやシャワーを浴びるとき以外はずっとそのようにしていたのだろうと思う。すでに中国各地をまわり、雲南地方をまわり、旅の終わりにここ昆明に落ち着いたのかもしれない。何をするとということもなく、ただ時間つぶしのようにして水煙草を吸い続けている。時間つぶしのようにして、一九九七年。一九九七年まで。

彼の意識の中で、中国というものがどのような位置を占めているのか、僕には分からない。それは故郷のようなものだろうか、それとも頭固な祖父のような存在なのだろうか、それともむしろ手に負えない赤子のような存在なのだろうか。あるいは硬直して言うことを聞かない身体？ただひとつ確かなことは、やがてすぐにも彼はその中国というものに付属し、あるいは中国というものが彼に帰属するということだ。否応もなく。香港人たちは自らが帰属することになる中国というものとの出会いを求めて中国を旅する。だがそれは水が低きに流れるというような自然な経験ではない。むしろ香港と中国という二つの帰属を巡っての葛藤であり、中国というものに葛藤なく着地することに對する抵抗なのだ。

言葉少なく、僕は彼と会話をした。当り障りのないこと、たとえば旅の情報など。ふと西安の印象を尋ねたとき、

「ダーティー！」

と彼はひと言答えたのだった。まるで彼の中国旅行を総括するようにして。そして時間つぶしの中空を漂うように、その不安定感をなだめるよ

うに、かたくなに水煙草を吸い続ける。暗がりの中で。

※

今朝、貴陽からの列車が昆明（クンミン）に到着したのは、八時半頃だった。

乗客たちに押し流されるようにして改札を通り抜けると、ひっそりとした印象の貴陽站とは違って、雑然とした印象で、僕は都会に戻ってきたのだという気がした。

駅前広場を歩き始めようとすると、二〇才くらいの女性に声をかけられた。立ち止まって話を聞いていると、はつきりとは分からなかったけれども、北京から来て、財布を落したか盗まれたかで困っているということだった。北京の父親に連絡するために長距離電話をかけたいので一五元貸してほしいという話だった。

身分証を見せながらの話だったし、そばには母親らしい女性もいたので僕は信用し、貸してあげた。女性は北京の連絡先を手帳に書き、ペーじを破って手渡す。それから、おながが減ってごはんを食べたいので、よかつたらもう五〇元貸してください、と言う。北京からこんなに遠くまで来て一文無しでは大変だろうと、五〇元を貸してあげ、彼女が差し出した手帳に日本の住所を書いた。

「謝々、謝々」と繰り返す彼女たちと別れて駅前広場を歩き始めたとき、ふと南京での出来事とその後味の悪さが頭を過ぎった。

（公平のために、その後彼女たちからの送金はなかったということをつけ加えておかなければならない。）

昆明火車站は昆明市の南端に位置し、そこから北方へと北京路と名付けられた大通りが伸びている。

早朝に雨が降ったのかもしれない。所々に雨のなごりを留めた歩道を昆湖（クンフー）飯店めざして歩いた。昆湖飯店は北京路沿いにあり、火車站からは一キロほど。ガイドブックに紹介されている安宿で一番近いところを選んだのだ。

やがて北京路は環城南路と交差し、それを渡ったところには国防賓館というぶつそうな名前のホテルがあり、その隣が昆湖飯店。

気を引き締めてフロントに向かったのだけれども、あつけないほど簡単にドミトリの四人部屋にもぐり込むことができた。一泊一二元。それに住宿証の保証金が一〇元。エレベーターで八階まで上って、ベッドに落ち着いた。国籍不明の男が椅子に腰を下ろして、何やら大きな竹の筒をか

かえていた。

しばらく休憩したあと、ホテルを出た。お土産を日本に送ってしまったために郵便局（郵電大樓）を偵察すること。そのあとで雲南博物館を見学し、それから昆明市の西南はずれにある大観楼へ行つてゆつくりしよう。

北京路の歩道をバス停に向かつて歩いてみると、男が何か食べ物を売っていた。近づいてみると、平たくした餅を揚げて砂糖をまぶしたもので。

朝飯を食べていなかったたので、それを買つてバス待ちをしながら食べた。

北京路と東風東路との交差点、工人文化宮のある広場（クアンチャン）で満点のバスを降り、交差点を隔てた真向かいにある郵電大樓へ。（ちようどのあたりが昆明市の中心にあたる。）建物を入っていくと、いくつかの窓口があり、人々で混雑していたけれども、国際郵便を扱う窓口は見当らなかった。地図には別に昆明飯店付近に国際郵便局というのが示されているので、そちらの方なのかもしれないと思う。帰りにそちらを覗いてみよう。

再びバスに乗つて東風西路にある雲南博物館へ。少し乗り過ぎして、小西門で降りた。小西門から東の方、武成路を眺めると茶色に統一された古い街並が続いていた。木造二階建ての瓦屋根の建物で、一階は商店など。低い街並の背後には建築中の現代的なビルディングがそびえていた。ビルディングの屋上には人の頭のように見える展望台（？）が乗っついて、いかにも現代的な風貌だ。ただ、建築中のビルは竹の足場におおわれ、竹の衣をまとっていたけれども。

小西門からバス停ふたつほどの距離を歩いて、さて博物館の入場券を買おうとズボンの後ポケットを探したが、お金がない。

「あれ？」と僕は思う。確か三〇元くらいは残っていたはずなのに。ちよつと不思議な気もしたけれども、前ポケットから財布を出して支払った。（中国人の男たちは普通財布など持たないようだ。小銭はしわくちやのままポケットに突っ込んでいる。僕もそれに習つて、一角二角の小銭は前ポケットに、五元一〇元の札は後ポケットに、大きな金額の人民幣とF E Cは財布に入れて、もうひとつの前ポケットに入れていた。）

博物館の展示は一階のみで、省内の少数民族関係の展示。階上は改装中らしくて入れなかった。ぐるつとひとまわりして、少し疲れたので博物館前の木陰で休憩。

再び、小西門から四路バスに乗つて、大観公園に向かった。四路バスは終点が大観公園、途中繁華街を通るのでしばらくは混雑していたがすぐに空いた。公園前の食堂で昼食。しばらくまともなごはんを食べていないので、たつぷりと食べた。それから公園に入園し、中国人観光客に混じつて木立のあいだの小道をたどり、滇池と名付けられた湖のほとりにそび

える大観楼に上った。

(滇(てん)という文字はめずらしいので辞書で調べてみると『雲南地方の別称、あるいは漢代、今の雲南省一帯に居住していた蛮族の名』とある。雲南、貴州、広西、広東地方を中国の版図として制圧したのは漢の武帝だといわれている。当時貴州西南部から雲南東北部にかけて夜郎国があり、武帝は夜郎国支配を足場にして広西、広東の南越国、さらには雲南の滇国を漢の版図に編入した。時代は日本でいえば弥生時代。稲作の民としての滇を蛮族と呼ぶのはもちろん不当だろうと思う。)

大観楼の楼上からははるかに滇池が見渡せた。その風景が美しいので、カメラを構える中国人の観光客たちに習って、僕もカメラを取り出そうとしてナップサックを探った。

「あれ？」と疑問符が頭を過ぎった。カメラがないのだ。あわててもう一度こんどは隅から隅まで探るが、やはりカメラはない。頭の中を過ぎった疑問詞がこんどは頭の真中に貼り付いて、その背後からどんよりとした鉛色の雲がわき上がってきた。観光客気分もかき消えて、僕は愕然とする。逃げるようにして大観楼をあとにした。

大観公園に来る前に小西門で写真を撮った記憶があるから、ホテルに忘れてきたわけではない。人と接触したのは満員バスの中だけだから、おそらくバスの中ですられたのだろう。小西門から公園までのあいだし考えられない。

ふと博物館の入場るときにズボンの後ポケットに入れていた三〇元ほどの札がなくなっていたことを思い出した。それもたぶんバスの中ですられたのだろう。しかし、札をすられたのはホテルから博物館のあいだのことだ。そこで写真を撮ったから、カメラをすられたのはそのあとのことだ。だとすると僕はわずかの時間で二回もスリにあい、しかもそのことを今の今まで気付かなかったということになる。

大観公園での観光客気分も吹き飛んで、僕は暗い気分ですバス停へと戻った。これがかつばらいならばすべては明快で、それなりに納得できるのだけれども、事実はあるはずのカメラがなくなっているということだけなのだ。何か暗闇の中から匿名の手が伸びて、知らないあいだにナップサックからカメラをすられたという感じだった。とても気味悪い感じがしたし、何か闇の中国とでもいったものを感じた。ただの観光客としての僕が漂っている表層の中国ということからはうかがい知れない中国のようなもの。そしてそこから伸びてくる無数の匿名の手。すでに一ヶ月近くも中国を漂い続けているのに、僕はもしかしたら中国というものの一片にも触れえていないのかもしれない。

幸いバッタ屋で買った安物のカメラだったし、警察に届ける気はしな

かった。(警察に届けたところでカメラが戻ってくるとは思えなかったし、警察と関わりになるのはご免だった。)しかしカメラは必要なもので、街中に戻って適当な店で買うことにした。

公園前からバスに乗って、小西門付近で下車。その間ナップサックを抱えるようにして防衛していたのは言うまでもない。いつのまにか僕の気持ちに呼応するかのようにとんよりとした雲が空には立ちこめていた。

小西門付近のカメラ屋、電気店などを覗いて、適当なカメラを物色した。日本製のカメラは一〇〇〇元以上、中国製のものは一、三〇〇元くらいだった。中国で日本製の高いカメラを買うのもばからしい気がしたし、確実に写ってくればそれで十分なので、中国製のものを買うことにした。おそらく全自動のカメラは日本との合弁会社の作だろうし、中国人の観光客たちも使っているカメラなのだから問題はないだろうと思う。

とあるカメラ店で二八五元のカメラを買った。電池とフィルムを付けて三二〇元。ボディには『35mmLENS MADE IN JAPAN』と記されている。しかし会社名はというと『KINON』キヤノンならぬキノン社の「日本」製カメラを手にして、何故か僕は少しうれしくなる。

真新しいカメラでさつそく小西門から古い街並をパチリ。それから東風東路の並木道を歩き始めた。痛い出費だったけれども、これでもとの状態。それに買い物には何か心を浮き立たせる効果があるようだ。もう過ぎ去ったことと完全にふっ切れたわけではないけれども、どんよりと鉛色だった心が少し軽くなった。もつとも空模様の方はますます厚い雲が立ちこめて、しばらくするとポツリポツリと雨が降り始めたけれども。

傘をさして雨の昆明を歩いた。ホテルまではかなりの距離があったけれども、事件のあとであまりバスに乗る気にはなれなかった。繁華街の百貨大楼や電気店ではショーウインドを覗いて、陳列されたカメラとその値段を確かめた。損な買い物ではなかったということを確認するために。中心地の地下街(というよりも商店の並んだ地下道というくらいの規模だ)を通り抜け、地図を確かめながら裏道の庶民的な繁華街を歩いた。雨は昆明の裏遣りを濡らし、強くなったり弱くなったりしながら降り続いていった。

(昆明の雨は南寧のスコールとはまったく違う。緯度からいうと、昆明はちょうど台北市と同じ。南寧の少し北にあたるけれども、昆明の高度は海抜一八九五メートル。気候はむしろ日本に近い。昆明の雨は南寧のスコールと日本の雨の中間のようだ。雨は一日中降り続くことはなく、ザーツとしぶいたかと思うと、すぐに嘘のように晴れ渡る。しかし雨も日差しも亜熱帯の強烈さはなくて、洗うというよりもむしろ濡らす雨だ。)

昆湖飯店近くの国際郵便局を覗く。それらしい小包を手続きする人も目について、おそろくここがいいのだと納得する。それからスパーパー形式の商店で雲南コーヒーと布フィルターを買って昆湖飯店に戻った。

中国に入国以来、久しぶりのコーヒーを飲みながら、ベッドに腰を下ろしてカメラの説明書を眺めた。もちろん中国語の説明書は正確には理解できなかったけれども、全自動カメラは何も難しいことはないだろうと、適当に読み飛ばした。

目の前には国籍不明の男が大きな竹の筒を抱えていた、たぶん水煙草なのだろうとは思ったけれども。

「どこから来ましたか？」

と声をかけると、男は

「シヤンカン（香港）」

と答えた。それから片言の会話を少し。男に誘われて水煙草に挑戦したが、太い竹の筒は空気がもれて、うまく煙草を吸うことができなかった。

しばらくホテルの部屋で休憩したあと、夕暮れの街に出た。火車站へ行って列車の状況を調べることと、晩ごはんを食べること。

ホテルから一歩足を踏み出すと、少数民族の民族衣裳に身を包んだおばさんが「チェンジマネー」と声をかけてきた。「またあとで」と言いながら振り切って歩道を歩き始める。路上にはカゴに果物を並べた露店。盲目の人たちの路上アンマ店。

所々に人々がたむろする北京路をひたすら南下した。昆明観光の案内を張り出した店の前を通り、汽车站のように見える敷地前を通り、百貨大樓の前を通り、駅前の商店とその賑わいを通り抜けて、火車站の售票処へ。

售票処の窓口はすでにほとんどが閉ざされていたが、窓口の上には切符の状況が書き出されていた。それによると硬臥はどの方面行きもほとんどが后天まで『無』。かなり厳しい状況だった。外国人旅行者の多い観光地昆明にふさわしく、英語のプレートも張り出してあった。それによるとここには外国人用の窓口などの優遇もないようなのだった。

售票処でだいたいの状況を調べたあと、駅前の食堂で晩ごはん。女主人は料理の説明をしたり、お茶を入れてくれたり、いろいろと親切にしてくれた。にがうりと肉の炒めもの、豆腐の料理、卵とトマトのスープ、それに米飯で一円。

満腹になって、帰り道、大きな商店でお土産のお茶を買い足した。適当に三種のお茶を三個ずつ。若い服務員の女性は値段の合計をそろばんで計算するのだけれども、それが合わない。先輩格の服務員が出てきてもう一度計算する。それでも合わなくて、二人であーだこーだと相談しながら

計算して、ようやくお茶を買うことができた。

昆湖飯店の前で待ちかまえていた少数民族のおばさんと約束通りチェンジマネー。レートは一七〇元。

途中で水しか出なくなつた共同シャワーに凍えながら悪戦苦闘して、一日が終わる。

香港人は竹の水煙草をことりと机に置いてベッドに向かう。僕ももう眠つてしまおうと思う。

※

次の日は朝から雨が降っていた。

大きな手さげ袋に一杯になつたお土産品(主としてお茶)や不要な品(本など)を郵送するために国際郵便局へと向かう。書類を書き込むのに手間取ったり、小包の梱包に必要なダンボール箱やガムテープなどを買うために付近の文房具店を何回か往復したり、と少し時間を取つたけれども無事に発送することができた。小包の重量は六・二二キロで、送料は一一九・三元。小包の中身よりも送料の方が高い。しかし重い荷物を処分することができて、僕は少し身軽になつた気分だった。

雨はいつのまにか小降りになり、やがて上がった。まだ空には灰色の雨雲が立ちこめていたけれども、雲の切れ目には青空が覗いていた。

昼近くになって、箬竹(きょうちく)寺へ行ってみようと思つてホテルをあとにした。箬竹寺は雲南地方がまだ大理という独立国だった北宋年間(九六〇―一二七年)に建立されたという。市内からは西北へ約一六キロ、玉案山の中腹にある。

ガイドブックに従つて、雲南博物館の付近、雲南飯店前のバス停で箬竹寺行きのバスを待っていると、男が声をかけてきた。どうやら昼からは箬竹寺行きの公共バスはないらしい。男の手招きに従つて狭い路地を入つていくと、ミニバスが止まっていてすでに何人かの観光客らしき人たちが乗っていた。ミニバスに乗り込んでしばらく待っている間に西洋人観光客数人を交えた乗客は満員になり、ミニバスは出発した(片道五元)。バスはすぐに市街地を抜けて、山道を上っていく。二〇分ほどで山の中腹にある箬竹寺に到着した。

箬竹寺そのものは中国風の立派な寺だったがけれども、主要な建物は改築中らしくて工事現場のような様相だった。観光客も僕たちのグループだけで、ひっそりとしていた。ただ羅漢堂の五官羅漢だけは前に武漢の寺

で見たものよりもさらに写実的で彩色もされて息を飲むような迫力があった。

箒竹寺の境内をぐるっとひとまわりしたあと、寺前の簡易食堂で冷米线（一元）を食べた。客もいなくてがらんとした食堂だった。店の女の子は、いったいどこの人なのだろう、というように不思議そうな顔をしている。

「我是日本人」

と、いたずらっぽく先まわりして声をかけると、思いがけないことのように、女の子は笑いながら調理場の奥へ逃げていった。

出発予定の四時までにかんりの時間があつたので、付近の山道を散歩した。バス道からたまたま見つけた山道を歩いていくと、視界が開けて、彼方に昆明の街が見渡せた。曇り空の下に遠くの街はかすんでいた。山道には人通りもなく、静かだった。適当な所に腰を下ろして、煙草を吸った。

あたりを見漬すと、まばらな灌木のあいだから見える付近の山肌は裸だ。茶色い地肌を剥き出しにした山肌の中には申し訳程度の緑。一見僕は荒涼とした風景に異郷を感じていたのだけでも、よく考えてみると雲南は地理的には照葉樹林帯、決してこのような荒涼とした風景を生み出す風土ではない。おそらくは長年に渡る森林伐採、そして特に近年の開放経済による木材不足、盗伐によって森林はどんどん荒廃させられているのだろう。

四〇〇〇年の文明によって疲弊した大地。森林の減少、黄色い泥の河。人口の増加。開放経済の華やかさの影には地鳴りのような問題が噴出している。

（このことは何も中国だけの問題ではない。ただ経済大国としての日本は矛盾を外に転嫁することによって問題を隠蔽しているだけだ。日本の森林は中国の現実には比べると豊かだけれども、それはアジアの森林を丸裸にすることによって成り立っている。膨大な食料輸入によって農業の荒廃を隠蔽している。中国は矛盾を外に転嫁することはできない。その経済力と膨大な人口がそれを許さない。だから矛盾はそのまま露呈するしかないのだ。）

箒竹寺から市街地へと戻り、いったんホテルで今夜の宿泊料を支払ったあと、昨日小西門から眺めた武成路を東の方から歩いた。そこを通過してその北側にある翠湖公園へ行ってみようと思ったのだ。

武成路は庶民的な繁華街で、衣料品や食料品、食堂などの店が並んでいる。歩道には買物の人たちが賑やかに行き交い、路地には果物の露店や食べ物の屋台も並んでいる。人々の賑わいも楽しいけれども、何よりも目

を引くのは伝統的な建築様式のように思われる瓦屋根の木造二階屋が並んでいることだ。そして武成路を東から歩くとその多くは緑色に塗られている。小西門から武成路を眺めたときには建物は茶色に塗られていた。その色分けの意味は分からないけれども、何かほっとさせるような魅力的な景観だ。

武成路から細い路地を入ったところに小さな食堂があった。店の前に置かれたテーブルでは白髭のおじいさんが餃子を食べていた。おじいさんの向かいに腰を下ろして、晩ごはんまでのつなぎに餃子を食べた。

夕暮れ近い翠湖公園を歩いた。平日の夕方だからか、人気は少なくて寂しい感じだ。子供たちの遊技場、児童楽園も動いていない。中国の公園ではよく見かける野人展示や性知識展示などのテント小屋も客がないらしくて、售票の男も暇そうにしていた。いかにも人の興味を引きそうないかがわしい絵柄のカンバンが、人気のないテント小屋のかたわらにひっそりと立ちつくしていた。ゆっくりと公園内を散歩し、疲れると湖畔に腰を下ろして煙草を吸った。

翠湖公園を出て、円通寺前の大通り、円通街を歩いた。円通寺はすでに閉まっていたけれども、そのあたりがらんとした印象の大通りの北側には高級ホテルや高級商店、あるいはレストランなどが並んでいた。しばらく行くと大きな橋があり、橋の上から男たちが凧上げをしていた。夕刻の空にぽっかりと凧は浮かび、あるいはくるくると旋回して、落ちた。柵干にもたれて眺めると、赤い煉瓦塀の低い街並が続いていた。

青年路と名付けられた並木道を南の方に向かった。青年路の南端は工人文化宮。青年路は小さな商店などがわずかに店を開けているだけで落ち着いた静かな通りで、夕刻の並木道は気持ちが良い。

やがて静かな青年路の両側には大きなビルが目立ち始め、都会らしい賑わいが漂い始める。青年路の突き当たりは東風東路、その南には工人文化宮とその前広場。

夕暮れ近い広場はまるでお祭りのように人々で賑わっていた。散歩をする人、夕刻にゆつくりと憩う人。あるいは写真屋さんたち。広場の一角では青空カラオケを楽しむ人々の姿があった。長机にはスピーカーとカラオケセットが据えられ、その前にはマイクスタンド。マイクスタンドを囲うようにしてパイプ椅子が並べられて、歌を聞きながら順番を待っている。少女が上手に流行歌を歌っていた。これまで意識しては聞いたことがなかったけれども、どこかで聞いたことのある歌だった。少女の次にはおばさんが慣れない様子でマイクを握った。

賑やかな広場を渡り、工人文化宮脇の屋台街を抜けて、バス通りへ。(腹が減っていたけれども、家族連れやグループで楽しむ人々でいっぱい)

屋台には入りづらかった。)そのままバスに乗って火車站へ。

駅前広場の一角には何台もの大型バスが並んで停車していた。フロントには行き先を示すプレートが掲げてある。昆明から大理まで足をのばすつもりだったのだけれども、もしかしたらここから乗って行けるのかもしれない、と思う。一台一台行き先を確認し、大理行きのバスを捜した。いろいろな方面行きのバスの中に『下関・大理』行きを見つけた。バスの掃除をしていた男に尋ねる。「出発は朝九時、ここから。大理到着は夕方七時頃。料金は三八元」という答え。明日の朝、大理に向けて出発することに決めた。

駅前の食堂で夕食。食券制の食堂で、入口の食券売場で買った食券を調理カウンターで料理と交換する。青椒肉絲と鶏蛋湯と米飯で八元弱。

満腹になってホテルの方へ北京路の歩道を歩いていると、一〇才にもならないくらいの少女がひとり胡弓を弾いていた。少女の演奏はとても上手で、路上にはたくさんの人が輪になって彼女の演奏を聞いていた。演奏が一段落すると、人々は思い思いに一角二角の札を足もとの箱に投げ入れる。しばらく演奏に聞き入ったあと、僕も小銭を投げ入れた。

八階でエレベーターを降りて部屋に入ろうとすると、ずいぶんつかしい顔に出会った。一月前初めての中国に上陸して、上海の海佳飯店で一緒だった男。一週間分の宿代を先払いしてしまった男だ。名前は宮本くん。隣の部屋にしばらく滞在しているという話だ。彼の部屋でこれまでの足取りなどを披露しあった。大理から戻ったら一緒に石林へ行くことを約束した。

同室の香港人は相変わらず水煙草を吸っていた。軽く挨拶をして雲南コーヒーを入れる。彼も僕も、自分の方からコミュニケーションを求めるといふタイプではないようで、あまり会話にはならない。それに僕は香港人に対して英語で話すべきか、北京語でか、広東語でなのか分からなくてとまどうのだった。おそらく彼としてはどの言葉でもOKだっただろうが、僕の方は広東語はダメ、英語も北京語も片言だけなのだからもともと話にはならないのだけれども。それでも決してお互い煙たい感じではなくて、僕は部屋に戻るたびに彼が水煙草を吸っている姿を見ると、何故かほっとするような気がするのだった。

香港人のかたわらではラジカセが音楽を流していた。どこかで聞いたことのあるような歌謡曲。何曲目かに思い当たったのは、工人文化宮前の広場で少女が歌っていた歌。どこかで聞いたことがあるというのは、入国以来、街角やテレビなどで無意識のうちに耳にしていたということなのだろう。無意識のうちに耳になじんで、今初めてそのことに気付いた、そ

れは中国全土を席卷していた香港の歌謡曲だった。

（中国のテレビ番組の中にはもちろん歌謡曲を中心にした番組がある。しかし番組の作りも曲もどこか垢抜けないところがある。それに比べると香港台湾歌謡は飛び抜けてスマートな感じで、一歩先んじて開放された大衆文化はまたたく間に中国全土を席卷したという印象だ。）